

『視靈者の夢』のカント

須田 朗

一

著作家としては余りにも長すぎる十年間の沈黙を破って、カントが『純粹理性批判』（以下『批判』と略記）を著したのは、今（一九八一年五月）からちようど二百年前の一七八一年五月のことでした。ですからこれに因んでここで『批判』について話題を提供するのが、日頃これと悪戦苦闘している私にはびったりかもしれません。が、この本の内容の見渡しがい程の豊かさに比べて、私の思索・読解能力の余りの貧しさを考えるにつけ、限られた時間で（もっとも時間を限られなくても）この著作を論ずることはほとんど不可能だろうと思えます。そこで『批判』全体の基調をなしている特殊カント的な批判精神が最初はどのような形をとっていたかを、一七六〇年代のカントを手掛りにしながら、顧み、これによって『批判』の基本的な性格に側面から光をあててみようと思えます。しかも六〇年代の中でも特に、一七六六年に発表された『視靈者の夢』（以下『夢』と略記）という作品に即してこのことを考えてみるつもりです。

前批判期の著作の中から『夢』をとくに取りあげたのには、いくつかの理由があります。ひとつにはこれが、批判期をも含めたカントの全著作のなかで一際目立った作品だからです。なぜ目立つかといえば、文体や論の進め方がほかのカントの作品とはまるで違う印象を与えるからなのです。『夢』は、諧謔、椰揄、アイロニー、パロディ、果ては駄洒落といった、およそ哲学書には相応しくないスタイルで一貫して書かれています。こうしたいわばカントらしくからぬレトリックにまず個人的に引かれたのが、ひとつの理由です。けれども、むしろ理由はそれだけではありません。なぜ

なら、六〇年代著作群の中でとりわけこの著作は、『批判』との関係において注目すべき様々な問題をはらんでいると思われるからです。

たしかにこの小さな作品は、『批判』の、緻密ではあるが日常言語からみれば無味乾燥的な言葉使いとは、正反対の筆致に満ち満ちています。だから、これら二つの著作が同じ著者の手によって、同じ精神で書かれたなどということは、ほとんど信じられないくらいです。しかも同じ思想的境地から書かれたもの、らしいのです。「らしい」といったのは、次のような時間的な一致が二つの著作の間にはあるのですが、それはことによると、単なる偶然の一致だったかもしれないからです。

一七八一年に（『批判』の出版の後のことですが）ベルヌイに宛た手紙の中でカントは、昔ランベルトからもらった最初の手紙について、こんなことを述べています。ハランベルトは手紙の中で形而上学の革新のために互に協力し合おうと自分（カント）に提案してきたのだが、ちょうどその頃自分もこうした企てを始めたのでこの提案を喜んだが、自分としては近い将来この企ての見通しを完成することができると思われたので、今は雑音に乱されることなく、これを完成させ、しかる後に自分の纏まった考えを伝えて、ランベルトに批判を仰ぎたいと返事をした。ところが、意外に作業が難航し、今年になってようやく『純粹理性批判』としてこれが完成したが、その時には、大変残念なことだが、ランベルト氏は他界されてしまわれた。自分の仕事をもっとも早くもっともよく理解できるのは、彼を置いて外にないと思っている。

ところで、この文面にあるランベルトのカント宛の最初の手紙は一七六五年であることがわかっていますから、カントが形而上学の革新に取り組み始めたのは、『批判』のあらわれる何と十六年も前のことになるようです。形而上学の革新という使命をもった『批判』は、完成までに（沈黙の十年を含む）十六年の歴史をもっていたわけですから、ここでカントが『批判』の着想をえたちょうどその頃、一七六五年の秋に、カントは『夢』の原稿を、せわしげに書き下していたことが、文献

学者たちの研究で明らかにされています。

さてそうなると、文体のまるで違う二つの作品が、同じ頃のカントの心を占めていたわけですが、それは偶然の一致なのでしょうか。それとも、両者には内容的にも類似性や、さらに同一性があるのでしょうか。その辺を注意しながら、皆様ご存知の『批判』の方はやめにして、もっぱら『夢』を分析してみたいと思います。しかしその前に『夢』の周辺をかためなくてはなりません。

二

カントの同時代人に啓蒙思想家のメンデルズゾーン（カントの文通相手でもありません）という人がいます。この人が『夢』の書評の中で、カントはこの本で形而上学を嘲笑しようとしているのか、それとも視靈者を信じさせようとしているのか、さっぱりわからないといっています。同時代の文通相手にさえわからなかった著作の意図を、二百年以上もたったわれわれが、一読してわかるはずはありません。けれども、われわれは幸いなことに、この頃カントが日記風に書き残した内面の吐露を聞くことができますから、その分だけメンデルズゾーンよりカントを理解できるかもしれません。カントは一七六四年初頭に『美と崇高の感情に関する観察』を公にしますが、その自家用本の余白に（恐らく六四〇六五年頃に）書き込んだ断片群がその手掛りになるのです。これらに現われたかなり断片的な心情吐露を補って考えてみると、少なくとも『夢』へとカントを駆り立てたおおよそのパトスぐらいはつかむことができます。このパトス全体を代表する断章をひとつだけ引き合いに出せば、それはあの有名なルソー体験の告白です。「生来私は学者である。私は知ることを激しく渴望し、学問において一步でも上達したいという貪欲な不安に囚われ、あるいは、一步進むごとに満足を覚える。これのみが人類の名誉となりうると、かつて私の信じていた時期があった。そして私は無知な賤民を軽蔑していた。ルソーが私の誤りを正してくれた。このような目の眩んだ優越感が消えうせ、私は人間を尊敬することを学んだ。こうした人間観察が、他のす

べての学問研究に、人間の権利を回復するという価値を与えうるのであるから、もし私が学問研究に臨んでそう信じなかったとしたら、私は私自身をありきたりの労働者よりずっと無用なものと考えるだろう」。単純にいつてしまえば、人間の尊厳は学識では決まらないという一見平凡な真理に、カントは遠い回り道をしてようやく今、ルソーを通じて気がついたのです。そして、このルソー体験に支えられて、『夢』は書かれていたことをまず念頭におかなくてはなりません。

ところがそのパトスは、彼のこの頃のアカデミックな著作にはほとんど現われてはいません。六三年にカントが発表した『神の存在の唯一可能な証明根拠』は、大きな反響を呼び、それまでケーニヒスベルクにのみ聞えていたカントの名を、はじめて広くドイツ全体の学界に及ぼすことになりましたし、翌六四年に公刊された『自然神学と道徳の原則の判明性』によってカントの盛名はドイツの外にも広がっていたのです。けれどもこれらの著作には、この頃のルソー体験は少しも現わされてはいません。アカデミックな世界では研究者として成功し声名が高まりますが、その一方で学識中心のアカデミズムにカントは内心嫌気がさしていたのです。つまり学者としての世間的名声と内心の転回とは、この頃けつして軌を一にはいかなかったようです。ついでにいえば、カントのひそかな内的転回はアカデミックな著作ではなくむしろ、肉声となって講義の中で語られたり、若干のジャーナリスティックな活動の中で示されたりしていました。実際例えば、この頃カントの講義をきいたヘルダーは、カントが生き生きと語るルソーの思想に、感激して聞き惚れていたようですし、またケーニヒスベルク近郊の森から忽然と現われた自然児的狂信者コマルニキを機縁としてケーニヒスベルク学芸政治新聞に連載で発表した『脳病試論』には、ルソーの影響（ルソーの名前も）が、はっきり見てとれます。さて、このような活動の延長上にあるのが『夢』であるのですが、ところがアカデミックな世界のカントしか知らない人々、とりわけカントの才能に注目し形而上学に関する彼の次著を期待していた研究者たちは、この著作を読んで驚きもし、また形而上学者カントに失

望しもしたのです。メンデルスゾーンの戸惑いは、そのひとつの例にすぎません。

一体どうして、こんな予期に反するような著作ができあがったのでしょうか。この著作の成立の直接の切っ掛けは何でしょうか。そしてその題材は何だったのでしょうか。

三

『視霊者の夢』の視霊者とはスウェーデンボルク（スウェーデン語ではスウェーデンボリ）のことです。スウェーデンボルク（1688-1772）はスウェーデンの科学者・発明家・哲学者・神学者です。最初彼は、化学・物理学・天文学・鉱物学・生物学といったかなり広範囲な科学的業績でアカデミックな才能を発揮していました。また発明の天分ももっていたらしく、例えば月によって経度を発見する方法、ドッグの製造法や、飛行機や潜水艦の製造法などを考案したといわれます。しかしやがて、神によって霊的感覚を開かれたと言い始め、自分はこの世におけると同じ意識で霊界に入ることができると断言するようになったのです。そしてこの視霊に基づいて、多くの聖書注釈や神学上の著作を著わしました。科学者であり発明家であり神学者であり、そして何よりも霊媒である彼の名は、その数々の不思議な行いによって、当時ヨーロッパで評判となっていたのです。

カントは最初彼にかなり興味をもったようです。スウェーデンボルクの何が当初カントをそれほど引きつけたかは、定かにはわかりませんが、とにかくカントはかなりしつこくスウェーデンボルクのことを調査しています。例えば、スウェーデンボルクに直接会った人に彼の事蹟を問い合せたり、また七ペニヒという当時のカントの経済にとつてはかなりの大金を投じてスウェーデンボルクの全8巻の大著『神秘的な天体』を購入したり、あげくの果てには直接スウェーデンボルクに手紙を書いているのです。

こうして収集した奇談のいくつかが、『夢』の「第二部——歴史的な——」⁽¹⁾で紹介されています。その第一章はカントが他人から聞いて仕入れた話を、第二章はカント自身が『神秘的な天体』から読んで

えた話を、それぞれ批判的に紹介しています。例えば第一章ではスウェーデンボルクの奇蹟が三つ紹介されています。(1)一七六一年スウェーデンのある公妃が彼を宮廷に呼びよせて、ひとつの質問をした。それは彼女以外生きている人は誰も答えられない問いであった。しかるに数日後スウェーデンボルクがその答えをもつてくると、それは正しいものであった。彼は答をあの世から聞いたとしか思えなかった。云々 (2)スウェーデン宮廷つきオランダ公使の未亡人がある金細工師から一組の銀食器の支払が未払だとして請求をうけた。先頃亡くなった夫は几張面で借金をつくる人ではないのだが、残念なことに払った領収書が見当らない。そこでスウェーデンボルクに頼んで亡き夫はどこに領収書を仕舞ったかをきいてもらうことにした。数日後スウェーデンボルクが来て告げた場所を探したところ、件の領収書がでてきた。(3)一七五九年スウェーデンボルクは、ストックホルムの火事を五〇マイル以上も離れた場所で透視して人々に告げた。数日後馬で届いた報告は、火災の範囲も含めて寸分も違わなかった。

どれもこれも、今日でも女性週刊誌でまことしやかに取りあげられそうな怪しげな話ですが、実際カントはこの同じ話を、3年前(六三年)に、クノープロツホという若い女性に宛た手紙の中で、詳しく述べています。しかもその際カントは、「この種のいかかわしい話を自分はこれまでほとんど信じてはいなかったが、今度のスウェーデンボルクの場合は、これまでとは少し違うようだ」などと述べており、当時スウェーデンボルクへ並々ならぬ関心を抱いていたこと、彼について八方手をつくして調べたことなどを伝えているのです。

さてそうこうしているうちに、巷で評判のこの視霊者のことを、これまた学界で今をときめくカント先生が詳細に調べているようだという噂が、だんだん広がり始めました。(コマルニキ事件と同様今度も)カントがこれをどう評価しどう鑑定するか、人々は興味をもち始めます。そしてカントの所に問い合わせが、ひっきりなしにやってくるようになります。これらの不愉快な問い合わせに

一挙に答えるべく、やむをえず書き下したのが『夢』であった、とカントは言っています。「私はかつてスウェーデンボルグを直接に知る機会をもった人々に、彼の幻覚について好奇心にかられて照会をしたり、また幾度か文通をしたり、そして最後には彼の著作を取りよせたりしましたので、このことについて語るべきことを多くもっているのだということになってしまい、この珍しい話について私がおもっていると思われる知識をさらけだしてしまうまでは、絶えず質問攻めに会って安心する暇もないだろうと思っただけです」(X, 69)。先の書評で『夢』の意図がさっぱりわからないと論評したメンデルスゾーンにあてて、カントは(66年に)こう釈明しています。この著作は「いわば強いて書かされた著作」であるから、執筆の際の自分の意にみたくない思いが、作品に若干あらわれていることに一読して気づいていただけたと思うが、とも述べています。この「意にみたくない思い」は、『夢』の「前置き」の中に半分ふざけた言い回しで、はっきりあらわれています。それは『夢』の執筆の動機とその結論を同時に述べた箇所です。「いくらかの真理の見せかけをもって物語られる多くのものについて、疑うさしたる理由もないのに、一切信じないというのは、世間の風評のいうところを、吟味もせずに、一切信ずるのと同じく、愚かな先入見であるから、本書の著者は、前者から生ずる先入見を避けるために、一部分は、後者に引きづけられた。筆者は、上述の種類の二・三の物語の真偽を探究するほどには、素直 (Treuherzig 信じやすい・疑い深くない) であったことを、ある種の卑下をもって告白する。「そして」筆者は発見したのだ——探求すべきものが何もない場合に一般にそうであるように——何もないことを。さてこのことはたしかに、それ自体すでに一冊の本を著わすための十分な原因であるが、さらにその上に、控え目な著者たちからすでにたびたび無理に書物を書かせたこと、即ち既知及び未知の友人たちの激しい懇請が付け加わった。さらに、大部の著作が買い込まれ、もっと悪いことには、読まれもしたのだが、この骨折りは無駄になってはならないであろう」(II, 318)。

カントは、本書執筆の動機をこういつていますが、この言葉を額面通り受けとるのは危険です。大枚七ペニツヒをはいて『神秘的な天体』を買い、さらにかんりの時間をついやしてそれを読んだことを無駄にしたいということが、まさか執筆の動機であろうはずはありません。また知人の懇請を避けるためだけに、作品ができあがったわけでもないでしょう。そして恐らくまた、単にスウェーデンボルクの奇蹟話を夢物語と鑑定するためにだけ、この作品が書かれたのではないと思われまます。カントには実は、この時事的な話題を通して述べたかった別の意図があったのです。

第二部第二章の終り——それは同時に次の第三章の導入部の役割をも果しているのだが——で、この書の隠れた本当の意図が述べられています。カントはおおよそ次のような主旨のことをいっています。△好奇心旺盛で暇な友人たちの照会と催促がなかったら、こんな役にも立たない題材を扱わなかった。しかも結果的にみれば、私は彼らの期待を裏切ることになった。読者を長々と引き回したあげくに、またぞろ最初の無知の状態に彼らを連れ戻したからだ。しかしこうした論述を通じて私は、当初の目的よりもはるかに重大な目的を実は目ざしていたのである。▽と前置きして、やや唐突な感じで次のように続けるのです。△私は形而上学に惚れ込んでいます。もしかりに形而上学の方からは、好意をわずかしめ示してもらえなくても（つまり自分の思いが片思いであっても）この熱愛は私の運命なのだ。けれども、形而上学が私に約束してくれる利益は二種類ある。第一は、事物の隠れた性質を理性によって明らかにしてくれることである。しかしこの約束は、うまく果されることがほとんどないのであって、霊についても実際何ら知識を与えてくれなかった。もうひとつの利益は、人間悟性の本性にずっと合致しているものであって、即ちそれは、問われている課題が人間の知りうるから規定されているか否かを洞察することの中にある。つまり、経験概念に問題がどう関係するかを理解するという利益である。この場合の形而上学は△人間理性の限界についての学▽となる。形而上学のこの効用、彼女が与えてくれるこの好意こそ、もっとも知られてい

ないが、もっとも重要な利益なのである。実際この第二の利益は、かなり遅くなって、長い経験をへたのちに始めて達成される。筆者が読者を引き回したのは、そのためであった（II, 367~8）。以上からわかるように、『夢』の真の目的は、この形而上学の第二の、そして真のあり方を知らしめるところにあったようです。

四

このことは、『夢』の構成（即ち議論の進め方）を考えるうえで大変重要です。『夢』の正確な書名は、『形而上学の夢によって説明されるある祝霊者の夢』という長いものですが、そのタイトル通り、この本の構成は、形而上学者たちの夢の検討を通じてスウェーデンボルクの夢物語が解明されるという仕組になっています。このことは目次を見ればよくわかります。⁽¹⁾「独断的であるところの第一部」全体で形而上学の夢が紹介検討され、それに基づいて「歴史的な第二部」で、時事的な話題すなわちスウェーデンボルクの祝霊体験が紹介検討されるわけです。第一部はアカデミズムを内容としてもち、第二部はジャーナリズムを内容的に含むといってもよいでしょう。この構成順序だけを見ると、カントの目ざす最終目的はスウェーデンボルクの鑑定のようにもみえますが、すでにカントの真の意図を知ったわれわれには、これが表面的な構成でしかないことがわかるはずです。しかしそれにしても、わざわざこうしたひねくれた構成の仕方をとった理由は何なのでしょう。それは恐らく、アカデミズムに対するカントの痛烈なアイロニーであろうと思われます。そしてそのアイロニーの背後には、煩瑣で不毛なアカデミズムの議論に対するカントの強烈な不信感があったのです。「偽りの物語を不注意に信じて騙されるよりも、理性の似非根拠を盲目的に信じて騙される方が賞讃されるでもないのだろうか」とカントはある箇所（II, 356）で述べています。ともかくも、カントの本当の狙いは第一部であったのですから、われわれもその部分に特に注目しなければなりません。

再び目次^①を見てもらえばわかるように、第一部は四章からなっています。そしてそれらは、およそ次のような順序でつながりながら展開されています。まず第一章は Geist (霊 (魂)、精神、心) という概念の概念内容を分析します。そして以下の問題の所在が、心身問題 (物質 (物体) と精神 (霊) の関係の問題) であることを提示しています。目次に言う「もつれた、ひとつの形而上学上の結び目」とは、心身を結ぶ結び目のことです。これを受けて最初に登場するのが第二章の神秘哲学の主張です。つまり、身体と霊との相互作用を前提し、両者がたとえいかに複雑であっても、どこかで結びついているとみなし、両者の複雑な結び目を丁寧に解きほぐす、つまり両者の連続性を丁寧に説明するのが、第一章の神秘哲学の試みです。ヴォルフ流の形而上学を神秘哲学と称している所に、すでに嘲笑の響きがあります。次に第二章とは逆に、この結び目を一刀両断に切り離して、両者の相互関係をまったく認めようとしないのが、第三章の通俗哲学の説明理論です。そして第四章の「第一部全体からの結論」の章で、通俗哲学風に簡単に、霊界と手を切ることのできないカント自身の弱さないしは信じやすさが自嘲的に告白されています。そして以上の展開の最初と最後におかれているのが、この問題に関するカント自身の無知の告白です。この二種類の告白、即ち信じやすさの告白と無知の告白とが、錯綜していることが、この本をかなり判読しがたいものになっていると思われるのですが、いずれにしろ Ich (私) を多用するこの本は、告白文学特有の半透明さともいったものを多分に含んでいるようです。

五

さて第一章の出だしでカントは、Geist が何であるか、ましてや Geist が存在するかは、自分は全く知らないといっています。こののっけから告げられる無知の立場は、学校 (講壇) 形而上学の知の立場へ向けて痛烈なアイロニーであることは、以下に続く次の言葉からも明らかです。「大学における方法的なおしゃべりは、しばしば定まらない語義によって、解き難い問題を回避するための、

なれあいにすぎない。なぜなら「私は知らない」[√]という、気楽なそしてほとんどの場合合理的でもある言葉が、大学では容易に聞かれぬからである」(F. 39)。恐らく意識してだろうと思いますが、カントはソクラテスと全く同じやり方で、つまり無知を装いながら、学校形而上学の霊の定義を批判的に分析していきます。あえて「無知を装う」といったのは、これに続くカントの分析をみていると、その分析が、学校哲学にかなり精通していなければできない作業だからです。カントが講義で教科書としてつけたバウムガルテンの『形而上学』の中の合理的心理学あたりがどうやら検討対象になっているようですから、精通しているのは当然といえば当然ではあるのですが。

ところで学校形而上学においては、霊は物質と対比して定義されます。物質は、延長をもち、したがって可分的であり、しかも不可入的だということです。これに對して霊は、単純であり、理性をもち、そして(これが問題の点だとカントは考えるのですが)不可入性をもたないで空間を占めることができるといわれます。これらの性質をもつものが何を意味するか、カントには皆目わからないが、形而上学者たちはそれで何かを理解したつもりでいる。そればかりではなく、彼らはそのようなものが存在すること、しかもわれわれはそれを近しく知っていること、すなわちわれわれの各自の思惟する自我がそのような霊の一員だということ、これらを主張するのです。

ところがカントは、こうした主張に懐疑的です。彼はいいいます。自我はたしかに働きにおいて単純であり、理性という性格をもつかもしれない。しかしそれが、不可入性をもたない空間存在体(つまりいわゆる霊)であると考えられると、われわれが日常的に体験している心身の相互関係は、霊界と物体界の相互作用の一例と化し、神秘がかったものになってくる。そこから、霊は物体界のどこにあるか[√]という不当な難問も生じてくるのであって、これに、人間の身体の中に[√]と答えるわけにはいかない。かりにできたとしても、さらにつづけて、霊はそれならば、身体のどこにあるか[√]という同様に不当な難問が生じてくることになる。カントによれば、この第二の問

は油断のならない問いであって、実はひとつの暗黙の前提を（第一の問いと同様に）隠しもっている。つまりそれは、 \wedge 心が身体中のどこか一定の場所に定位している \vee という前提である。しかし常識と体験は、人間の精神的活動が身体の一部（例えば脳の一部）に限定されなことを示している。むしろ常識と経験は、「私の精神が身体全体に、またその各々の部分に存在する」ことを教えている、というのです。結局心身関係については、常識や経験が教える以上のことを \wedge 私は知らない \vee というのが、カントの最初のそしてまた最後の立場なのです。

さて以上のようにして、問題の所在が明らかにされました。けれどもカント自身ははじめからそれへの解答を拒否しています。そして第一章の最後で、ただ次のように告白するだけです。 \wedge 私個人はできるなら霊的存在者のこの世における存在を主張したい。したいけれども、もしもそうすると、精神と物質、心と身体相互作用が何と神秘化してしまうことか \vee と。カントは、一方では霊的存在を信じたいという欲求を押し切れず、他方ではそれによって生ずる自然学的困難をはっきり自覚していたようです。この欲求と困難の間を、カントの心はいつたり来たりしています。心のこの動揺を気持ちの上で整理できたかどうかかわかりませんが、少なくとも悟性の上では心を一方に落ち着かせることに成功するのです。そのプロセスとなるのが、第二章と第三章なのです。

六

第一部第二章と第三章は、すでに述べた通り、真向から対立しています。論争の焦点は、アカデミズムの言葉で言えば、心身問題ですがジャーナリズムの言葉でカリカチュアライズしていえば、霊界との交感を認めて神秘に走るか、これを否定して通俗に墮するかという問題、つまりはスウェーデンボルクの鑑定の問題になるわけです。そこで第二部に引きつけながら、この二つの章の立場を簡単にまとめてみましょう。

スウェーデンボルクはペテン師でも詐欺師でもない、とカントは考えています。もしスウェーデ

ンボルクが嘘をついていないとすれば、彼が体験したと言いつける視霊体験を何らかの形で説明しうるものでなければならぬ。どのような説明理論が可能であろうか。引き出される結論が互に全く正反対の説明理論、つまり第二章と第三章が、この場合可能なのです。

まず両章とも、スウェーデンボルクが尋常ならざる経験や感覚をもつ妄想家であることを認める。しかし第二章の神秘哲学は、例えば生命現象や道德感情などを根拠にして霊(界)の存在を証明し、その霊(界)から人間——それも稀有な才能をもつ人間——への霊的影響を認める立場に立つて、スウェーデンボルクの異常な体験や妄想は、まさしく霊の影響の結果だと説明する。ところが次の第三章の通俗哲学は、視霊者に対して非常に冷淡であって、スウェーデンボルクのような手合いは、何か不幸な偶然によって頭脳に欠陥が生じ、その結果、自分の頭で創り上げたイメージを身体の外にあるものと信じ込んでしまった一種の精神異常者である、という風に説明を行うのです。(その説明の過程でカントは、デカルトが『情念論』で展開したような一種の機械論的生理学を使ったりしています)。要するに、第三章の説明は第二章とは因果が逆であって、霊界が妄想をひきおこしたのではなく、妄想が霊界を生み出したのだと説くわけです。そうして通俗哲学は、第三章の終り近くでとどめをさすように、前章(第二章)の深遠な推測は全く不必要であり、われわれは視霊者を敬うべきではなく、むしろあわれんで病院へ送るべきだと述べています。あるいは以前にあったように彼らを火責めにするのではなく、下剤をかけるべきである、とさえ述べています。

さて以上が、視霊問題についての二種の説明理論のきわめて大ざっぱな紹介ですが、注目すべき点は、これら二つの理論(ないしは章)に対してカントがとっている態度です。カント自身はどちらに加担するのでしょうか。

論述の順序からすれば、この論争で最後の言葉をのべる第三章の側に勝利が帰せられるのは、当然です。カントは明らかに、通俗哲学の側に味方し加担しているようです。つまり、スウェーデン

ボルクは氣狂い以上の何もでもない、と判定されたのです。それ以上のことについては、私は知らない」と、カントは無知をきめこむわけです。さてこれで一件落着のようですが、ところが事はそう単純ではなさそうです。そのように思い当たるのが、いくつかあるのです。例えば、第三章の一番最後の文章は、通俗哲学の低俗性を半分茶化したような引用で終わっています——そしてこれは第二章の終り方と全く同じです——し、目次を見れば明らかなように、第三章も第二章と同等のレベルにあることを暗示するかのごとく、両章のタイトルはいわば語呂合せになっています。そしてこれらのいわば情況証拠以上に、カントが第二章に気持ちの上ではつきり傾いていることを示めず、いわば自白の証拠があるのです。それは第四章の冒頭に次のような比喻をつかつてあらわされています。

商取引の際に使う天秤に、はじめから不正な偏りがないかどうかを確かめるためには、品物と分銅の皿を取り換えてみればよい。同様に、悟性の秤りの偏りも同じ操作で吟味してみれば、すぐに露見する。(實際ここにいたるまでカントは、この吟味を続けてきたのです)。「私の(主張する)根拠(第二章)を反駁するようなひとの判断(第三章)を私は、まず第一に自愛の秤り皿の反対側におき、その次に自愛の皿の中において(いずれの場合も)私のいわゆる根拠と比量してみ、彼の側に私のよりも大きい実質を見出し出たならば、それ以後彼の判断は私のそれになる。この吟味以前には、私は一般的人間悟性を単に私の悟性の立場から考察した。いまや私は私を他人の外的理性の位置に移しおいて、自分の判断を、その最もひそかな動機もろとも、他人の視点から考察する。二つの考察の比較は、たしかに強い視差を生じはするが、それは視覚的欺瞞を避けて、諸概念を、それらが人間本来の認識能力に関して立っている真の位置におくための、唯一の手段である」(III 319)。以上のように補って読むと、ここまでの文章は、第二・第三章の総括とみることもできます。ところが、それに続く文章でカントは全く意外なことを言いだすのです。「悟性の秤りは、そ

れでもまったく公平であるわけではない。すなわち未来の希望という銘をもつ方の腕木は、ある機構的利点をもっており、その側の秤り皿にかかる軽い根拠（第二章）でも、反対側の（それ自身ではより重い）思弁（第三章）をはね上げてしまうのである。これが、私が取り除くことができない、また実際に取り除こうともしなかった唯一の不正である」（II, 349～350）。

これは一体どういうことでしょうか。カントは、せっかくここまで吟味をすすめてきたのに、何もかも無視して第二章の神秘哲学へ逆もどりしようとしているのでしょうか。議論を振り出しに戻しかねない原因は、「未来の希望」にあるのだと、カントはいつています。未来の希望とは何なのでしょうか。カントはどのような想いを込めて、この語を発するのででしょうか。カントはどのように言っています。

人は死後何らかの形で残存したいと希望する。それも幸福な来世を希望する。この希望が強いために巷では霊の存在が信じられ、スウェーデンボルグのような奇蹟談も信じられるようになる。学校では、それに乗じて形而上学理論が編み出されたりもする。学校形而上学の方はどうでもよいが、世間一般の人々がもつ未来への希望や夢を否定することはできない、とカントは考えるのです。

カントは民衆の素朴な信仰心の側に半面です。無知の告白が神秘哲学へ向けてのアイロニーだとすれば、この信仰告白は通俗哲学へ向けてのアイロニーではないでしょうか。けれども未来の希望のために、「それ自体ではより重い思弁」を犠牲にしてよいわけはありません。希望のために知を無視してよいわけはないはずです。しかしカントに言わせると、知と希望は絶対的に対立するものではないのです。それらはむしろ、互いに結び合わされうるのであり、またそうされなければならぬのです。

そのことが、第二部第三章「本書全体の実践的結論」の内容となるように思われます。

「あらゆる好奇心に身をまかせて、認識欲に対しては無能力以外の限界を許さないというのは、学識にとってふさわしくなくもない熱心さである。しかし、呈示される無数の課題の中で、その解決が人間にとって重要であるものを選び出すことは、知恵の功績である」。この二つの営みは結果的にはひとつに結ばれうるし、そうでなければならぬ、とカントは続ける。「学問がその活動範囲を一周し終わると、それはおのずから謙虚な不信の地点に達して、自分自身に不満を感じながらも、 \wedge それにしても私の洞察しないものが何と多くあることだろう \wedge という。しかし経験をへて成熟し知恵となった理性は、ソクラテスの口をかりて、歳の市の商品のただ中で、 \wedge それにしても、私が必要としないものが何と多くあることだろう \wedge と、晴れやかな心をもっていうのである。こうして非常に異なった性質の二つの努力が、たとえはじめは大変違った方向へ向けて出発したとしても、最後にはひとつに合流する」(368-9)。ここで無知の告白に到った「学識」、「学問」は、いうまでもなく「人間理性の限界についての学」としての形而上学、つまり第二の意味の形而上学を意味し、知恵とは人間の生にとって大切な問いの選択能力をさしています。この二つが結合するとき、つまり形而上学が人間の生と深く関わる時、「形而上学はそのとき、それが今はまだかなりそれから遠く隔たっているもの、即ち、知恵の侍女となる」(ibid.)。形而上学は、知恵に教えられはじめ、健全なる無知の満足を感ぜようようになる、ということです。こうして形而上学は変身する。しかし同時にまた、知恵も新たな形而上学と手を携えることによつて、その目的を達成するのである。「なぜなら、かくも隔たった洞察(例えば霊についての)に到達可能だという臆見が残っているかぎり、賢い単純さがそんな努力は必要ない、と叫んでも無駄であるからだ」(ibid.)。このように、認識の不可能の自覚と不必要の自覚は、手を携えなければならぬのです。

けれども従来の形而上学者たちは、例えばこんな風に推論したのです。霊的存在者についての理性的洞

察が死後の魂の存在を人々に確信させる。そしてこの確信がなければ、人は有徳な生を送ることができない。したがって、有徳な生を送るためには、靈に關する形而上学的洞察が必要である、と。

これに対してカントは主張します。「けれども真の知恵は、單純さの侍女であり、知恵にあつては心胸が悟性に命令するのだから、學識の大げさな武装は必要ない」(II, 372)。靈界を知ること、理性によつても、ましてや感覺によつてもできない。できないばかりでなく、不必要なのである。「來世が存在するが故にのみ、有徳であることが善であるのだろうか。あるいはむしろ、行為それ自体が善で有徳であるがゆえに、それがいつか報いられるということなのではないか。人間の心胸は直接的な道德的命令を含まないだろうか。そして、人間をこの世でその使命に従つて行動させるために、あの世にいつもマシーンを据えておかなくてはならないのか」(Ibid.)。こうして、カントに言わせれば、彼岸の世界は知りえないし、また少なくともこの世で道德的であらんがために、あの世や靈を知る必要は全くない。それゆえカントは、來世を知りたがる好奇心の強い人々に向けて、本書の一番最後でこう述べています。「諸君がそこに行くようになるときまで、じつと辛抱しようと思ひになるのが恐らく最も得策でしょうという、單純でしかもはなはだ當然な回答を、われわれは与えることができる。しかし來世におけるわれわれの運命は恐らく現在のこの世で自分の役目をいかに果たしたかによつて、大いにきまるらしいから、私は今ヴォルテールが彼の律義なカNDERドをして、山程の無益で煩瑣な哲學議論を経験させた後に、結論として言わせているところの言葉でもつて、結びとしよう。すなわち々々、お互いに自分達の幸福をおもんばかつて、庭に出て働こうではないか」(II, 373)。あの世への無知とこの世での実践を結びつけながら、『視靈者の夢』はここで明快に終わっています。してみれば明らかに、未來の希望は、ひとがこの世で道德的であるためには、必要ないのです。

ではそれならば、なぜカントは通俗哲學に全面的な支持を与えなかったのでしょうか。第一部第

四章でなぜ、いらぬ信仰告白などしたのでしようか。第二部第三章「本論全体の実践的結論」の終り近くで、この疑問の答らしきものにわれわれは出会うのです。それは、注意しないと何気なく読みとばしそうな従属文章です。「しかし、心正しい人で、しかも死と共に一切が終るといふ思想に耐ええた人はいなかった。心正しい人で、しかも未来の希望へその高貴な心術を高めなかった人はいなかった」(H. 373)。これは、カントの人間観察から語り出された言葉であると思われまます。この人間観察は本当に正しいのでしょうか。人はいずれにしろ、未来の希望なしには生きられないのでしょうか。もしカントの観察が正しいのであるならば、未来の希望は、人間の本性に根ざしたいわば一種の弱さの表現だといってもよいでしょう。そして、それが人間の本性に根ざすものならば、未来への希望は人間にとって問うに値する一個の問題であるはずです。カントはこの問いにどう答えるつもりだったのでしようか。少なくとも、どういう方向に答えを探そうとしていたのでしょうか。カントは同じ箇所一度、「道徳的信仰」という言葉を使っています。人間である限り、希望を捨てられないのであるならば、われわれに残される唯一の健全な希望の道は、恐らく「道徳的信仰」だろうという予想を、カントはここで立てています。scheinen (思われる) という語を使って断定をさけながらも、カントは次のように述べています。「してみれば、未来の世界への期待を、行い正しい人の感情の上に基礎づける方が、逆の場合、すなわち立派な行動を未来の希望の上に基礎づけるよりも、人間の本性と道徳の純粹さに一層適合しているように思われる」(Ibid.)。「思われる」という慎重な言い回しをしたのは、あくまでも「もし人間にどうしても未来が必要であるならば」という仮定の上で、この二つの可能性が比較されているからです。そしてカントがもし道徳的信仰の内に、来世への細い通路を多少とも期待していたとすれば、それは、カントが希望をもたざるをえない人間本性の宿命とでもいふべきものを、みずから自身の内に感じていたからではないでしょうか。いずれにしろ、カントにとって未来への希望もまた、認識や道徳と共に、知恵

の立場から無視しえないものであることは確かなようです。人間は知ることにおいても、行為においても、生存においても有限であります。そのような人間本性とその可能性の自覚こそが、カントの批判哲学の基本テーマであったと、私には思えるのですが、『視霊者の夢』にみられる二つの告白、すなわち独断的形而上学へ向けて語られる無知の告白と通俗哲学へ向けて語られる信仰の告白という一見矛盾していそうな二つの告白は、このような人間本性についての自覚の表現——ただしこの場合はアイロニカルな表現——ではなかったかと思えるのです。

八

カントは後年、自分の哲学的な仕事の全体を見渡して、こんなことを言っています。哲学には二つあって、ひとつは知識の論理的な整理をする学校概念としての哲学であり、もうひとつは、人間の運命にかかわる哲学つまり世界概念としての哲学である。後者が前者の根底になればならず、カント自身の哲学的営為もこの世界概念としての哲学に向けられた。ところでこの哲学は、三つの問いを含んでいる。しかもそれは基本的にはひとつのことを追求しようとしている。(1)「私は何を知りうるか」。これは人間理性の限界の学としての形而上学の問いである。(2)「私は何をなすべきか」。これは倫理学の問いである。(3)「私には何を望むことが許されるか」。これは宗教の問題である。そしてこれら三つの問いは、結局ひとつの問い「人間とは何であるか」に集約される、ということです。世界概念としての哲学が、このように「人間とは何であるか」という問いの追求だとすれば、それは、先にのべた意味での「知意」の立場に立った哲学といえることができるでしょう。

『視霊者の夢』でカントが目ざしていたものも、結局のところ、このひとつの問いに集約的に表わされるだろうと思います。カントは視霊現象という奇異なテーマをめぐって、「私は何を知りうるか」を検討し、結論としてカントに「私は何をなすべきか」を語らせ、そしてそれにもかかわらず最後に、人間本性から生ずるもうひとつの根源的な問いとして「私には何を望むことが許さ

れるか」に迫ろうとしています。これらは、挙げてひとつのこと、すなわち「人間とは何か」（人間本性の探究）に向けられていたということが出来ます。『夢』はそのような意味で、知恵の哲学の告白だったといえるのです。カントが『批判』の着想をえ、構想を練り始めた最も早いこの時期に、すでにこの三つの問いを有機的に連関するものとして考えていたことは、『批判』の性格を解釈する上で、注目すべきことであろうと思います。（一九八一年五月二日の拙い講演より）

注

(1) 『視壺者の夢』の目次

前置き——本文に対してほとんど何も約束しないところの——

第一部——ドグマ的であるところの——

第一章 随意に解いたり、あるいは切り離したりすることのできる、形而上学上のひとつのもつれた結び目

第二章 壺界との相互関係を開示すべき神秘哲学の断片

第三章 反カバラ。壺界との相互関係を廃棄すべき世俗哲学の断片

第四章 第一部全体からの理論的結論

第二部——歴史的な——

第一章 その真偽のほどが読者の自由な査定にゆだねられるひとつの物語

第二章 壺界をめぐる一狂信家の忘我的旅

第三章 本書全体の実践的帰結

(弘前大学助教授)